

泣いて謝られても 教会には戻りません!

追放された元聖女候補ですが、同じく追放された

『剣神』さまと意気投合したので第二の人生を始めます



【著】 ヒツキノドカ

Author: Hitsuキノドカ
Illustration: Aitanki

エドマーク

王国のギルドの支配人。
ハルクのことをすさまじく
信頼している。

国王

聖女を妃とし、クリスの父でもある。
国を治めることを
最も大切にしている。

聖女

王妃を務め、神の加護の力で
国王とともに王国を
守っている。

ハルク

『剣神』と呼ばれるほどの腕前を持つ
剣士だが、怪我をしたことにより、
今まで貢献してきたパーティを
追放された。世間知らずな
セルビアにいろいろなことを
教えてくれる。

登場人物紹介

リリアナ

聖女候補の一人。
クリスとは親密な関係にあり、
王妃の座に最も近い
セルビアを嫌っている。

ロレンス

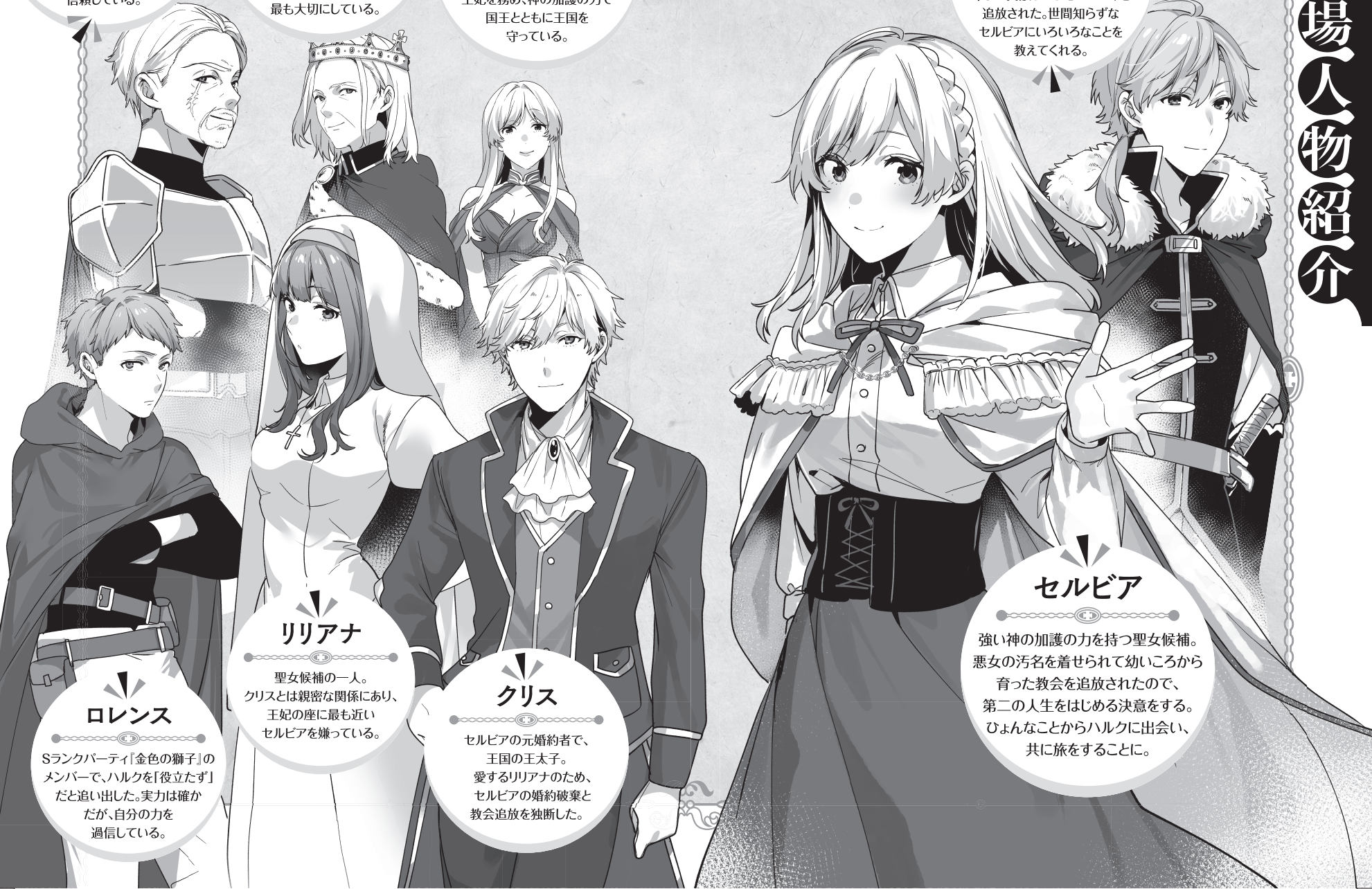
Sランクパーティ「金色の獅子」の
メンバーで、ハルクを「役立たず」
だと追い出した。実力は確か
だが、自分の力を
過信している。

クリス

セルビアの元婚約者で、
王国の王太子。
愛するリリアナのため、
セルビアの婚約破棄と
教会追放を独断した。

セルビア

強い神の加護の力を持つ聖女候補。
悪女の汚名を着せられて幼いころから
育った教会を追放されたので、
第二の人生をはじめる決意をする。
ひょんなことからハルクに出会い、
共に旅することに。



プロローグ

「聖女候補セルビア！ お前との婚約を破棄^{はき}する！
え、なに、どういうこと？

目の前でそう言ったのは、王太子のクリスマス様。

誰もが認める美男子だけど、今はその整った顔に怒^{いか}りの表情を浮かべている。

彼の横には、他の聖女候補たちが気遣うように立っている。数人の若い修道士たちまでいる。そんな彼らが揃^{そろ}って私を責めるような目で見ているんだけど――

うん、状況がさっぱりわからない。

「えっと、クリスマス様。婚約破棄^{はき}とはいったい……」

「とぼけるな！ 他の聖女候補たちから聞いたぞ！」

「聞いた？ 何を聞いたのですか？」

「お前が聖女候補という立場を利用し、若い修道士たちを次々食い物にする悪女だとな！」

「……へっ!?」

なんですかその誤解！ まったく心当たりがないんですが！



クリスマス様は視線を隣の修道士たちに移す。

「彼らにもきちんと裏を取った。間違はなくセルビア、貴様に純潔を捧げたと！ そうだな！」

「はい！ その通りです！」

若い修道士たちの大合唱。

待つて待つて待つて。本当に待つて。

「ち、違います！ 私はそんなことはしていません！ 何かの間違いです！」

私なんて、物心つく前に聖女候補として教会に引き取られてから十六歳の現在に至るまで、ひたすら祈禱を行ってきただけの人間だ。

正直、その手の経験なんてまったくない。

（むしろそういうことをしているのは私じゃなくて……）

私はちらりとクリスマス様の横に並ぶ聖女候補たちを見た。

そう、私以外の聖女候補たちの多くは、修道士や騎士なんかと関係を持つている。

教会の規律に照らせば思いっきりアウトだけど、無理もないのかな、とも思う。

聖女候補は、この教会の中からほとんど出られないんだから。

毎日祈禱ばかりやらされるのに飽きた聖女候補たちが、男漁りを始めるのも仕方ないというか。

（あれ、そういえばこの場にいる修道士たちって、みんな私以外の聖女候補とそういう関係だったような……？）

なんだか嫌な予感がしてきた。

確認してみよう。

「クリス様。私のその噂^{うわさ}って、誰から聞いたとおっしゃいました？」

「お前以外の聖女候補全員だ！」

「……全員？ 他の聖女候補たちが、一人残らず言ったんですか？」

「ああ。その通りだ！」

ほほう。私以外の聖女候補が揃^{そろ}ってですか。

クリス様から視線を動かすと、聖女候補たちが一様^{いちよう}にいやらしい笑みを浮かべている。まるで罠^{わな}にかかった獲物^{えもの}を見るように。

ああ、なるほど。そういうことか。

彼女たちは結託して私を嵌^はめたのだ。

（……そうまでして聖女になりたいんですか、あの人たちは）

この世界には、まれに全能神ラスティアの加護を受けた特別な子供が生まれる。癒^いしと浄化^{じやうか}の力を持つその子供は必ず女子であり、数はとても少ない。

それが聖女候補——私たちのことだ。

聖女候補は世界中から捜し出されて、この国の王都にある教会に集められる。

そして資質を測られ、聖女候補の中でもっとも力の強い者が聖女に選ばれるのだ。

聖女はさらに特別な存在だ。何しろこの国では、聖女となった者はその力で王とともに国を支えるべく、王妃という立場までも与えられるのだから。

聖女に選ばれた者が、王妃の座を手に入れる。

それが数百年続くこの国のならわしである。

見事聖女に選ばれば、王族に名を連ねて贅沢^{ぜいたくざんまい}三昧な日々が待っている。多くの聖女候補たちはそれを目的に教会へとやってきている。

……そして、私が今こうして追いつまれている原因もそれだ。

私は聖女候補の中でも特に強い力を持っているため、数か月前に迎えた十六歳の誕生日に、王太子であるクリス様と暫定的^{ざんていてき}な婚約を結んだ。

今後、他の聖女候補が私より強い力を使えるようにならなければ、クリス様が王位につくと同時に、聖女となり王妃となる予定だった。

そんな私は、彼女たちにとって目の上のたんこぶ以外の何物でもない。

私を排除するために、他の聖女候補が結託して私の悪評をクリス様に吹き込んだ。この真相はそんなところだろう。

本当にドロドロしてるなあ、この教会……

私は溜め息を吐^つき、クリス様たちに背を向けた。

すると、クリス様の険^{けわ}しい声が後ろから聞こえてくる。

「待て、どこに行く」

「……部屋に戻って休みます」

まさかこんなことになるとは思わなかった。少し頭を整理したい。

「部屋に？ 何を言ってるんだ。もうお前の部屋はここにはないぞ」
……はい？

クリス様の言葉に思わず振り向くと、彼はさも当然のように続ける。

「お前のような悪女が教会にいては品位が下がる。今すぐ荷物をまとめて出て行け！ そして二度と教会の扉をくぐるな！」

あまりのことに呆然としてしまう。

婚約破棄^{はき}だけならともかく……出て行け？ 教会の扉をくぐるな？

「ま、待つてください！ 私がいないと祈りが足りなくなります！」

聖女や聖女候補は、この地に眠る魔神^{まじん}を鎮めるために毎日祈りを捧^{ささ}げている。

その祈^{きとう}が不足すると魔神が復活し、世界を滅ぼすとされている。

けれどクリス様は私の言葉を鼻で笑った。

「はっ、聖女候補の一人がいなくなっただけくらいで、どうにかなるわけないだろう」

「いやその、普通はそうなんですが……」

どう説明したものかと、少し困ってしまう。

というのも、私は神様の加護が強いので、毎日他の聖女候補よりもかなり長い時間祈^{きとう}祷^{おこな}を行っているのだ。

それができるのは私しかないから。

そんな私が抜けると、かなり痛手のはず。

さすがにそれは自覚してる……よね？

他の聖女候補たちは口々に言う。

「クリス様のおっしゃる通りです！」

「あのような女狐^{めぎつね}がいようといまいと変わりません！」

「私たちだけで十分です！ 本当に聖女にふさわしいのが誰かご覧くださいませ！」

あ、駄目だこれ。ぜんぜん今後の対策をしてないみたい。

この人たち、自分が聖女になることしか考えてない……！

「クリス様、どうかお考え直してください！ このままでは国が滅びます！」

「しつこいぞ！ お前はもう私の婚約者でも聖女候補でもないのだ！ わかったらさっさと消えろ！」

修道士たちは私の腕を掴み、有無を言わず教会の出口に連れて行く。

そして、荷物とともに外に放り出された。

こうして私は教会を追放されたのだった。

第一章 元聖女候補は『剣神^{けんしん}』と出会う

「考えようによつては、自由になったってことですよね」

教会を追い出されたその足で街を歩きながら、私は呟いた。
今まで十年以上も尽くしてきた教会に捨てられたのは悲しいし、他の聖女候補たちに裏切られたのも悔しい。

けれど、様々ながらみから解放されたのも事実だ。

せつかく自由になれたんだから、色々やりたいことをやっていこう！

うん、それがいい。どうせ教会には戻れないだろうし。

……で、何をどうすればいいんだろう。

私は幼いうちに教会に預けられたので、世間のことをあんまり知らなかったりする。

「やっぱり、働くとか？」

食べ物を買うにはお金が必要だと聞いたことがある。

そして、教会を追い出された今の私は一文無し。

どうにかしてお金を手に入れないと飢え死にしてしまう。

とりあえず、手近なお店に入って働かせてもらえようお願いしてみよう。

「こんにちは」

近くにあった酒場に入り、店主さんに笑顔で話しかける。

すると店主さんは眉根を寄せて私を見た。

「おいおい嬢ちゃん、まだ営業時間外だよ」

「いえ、そうではなく。私をここで働かせていただけませんか？」

私がそう言うと、店主さんは考え込むような仕草をする。

「働かせて、ねえ。嬢ちゃん、料理は得意かい？」

「うーん……やったことないですね」

聖女候補の食事は見習い修道女たちが作って持ってきてくれていた。

聖女候補の仕事はあくまで祈ることだけ。それ以外はやらなくていいし、他のことをやるくらいならもっと祈れと司教様から怒られてしまう。

「掃除や皿洗いは？」

「それもやったことはないです」

そのあたりの雑用は全部見習い修道女たちが以下略。

「……金勘定はできるかね？」

「お金なら知っています！ 確か銅貨と銀貨と金貨があるんですよね」

「残念だが嬢ちゃんはウチには縁がなかったようだ」

ぼい、と店主さんに外に捨てられた。

どうやら不採用だったみたいだ。

……うん。なんというか、自分でもわかっていたけど……

（私つてもしかしてぜんぜん常識がないんじゃないか……!?）

思えば教会では身の回りのことは全部見習い修道女たちがやってくれた。

私が祈祷以外にやっていたことといえば、読み書きや歴史の勉強、オルガンや歌の練習、それと

王妃候補として最低限の礼儀作法を学んだくらい。

これってどんな仕事の役に立つの？

というか、使いどころは本当にあるの？

「と、とにかく仕事を探さないと、お金が……」

うーんうーんと、頭を抱えて考える。通行人の方々の視線が痛い。

この街には冒険者——魔物という人に害を与える生物を狩ったり、危険を伴う仕事を人から請け負ったりして生計を立てる職業の人たちが多いということは、教会で教わっていた。

周りを見回してみると、確かにいくつかの雰囲気だったり体中傷だらけだったり、威圧感のある人が多い。

……ん？ 傷だらけ？

（そうだ。私、回復魔術が使えるんだった）

この街は冒険者が多い。

←

冒険者は魔物と戦うから怪我が多い。

←

回復魔術をかけてもらいたい人がたくさんいる！
いける。回復魔術を売ればきつとお金が稼げる！

私はあちこち見て、怪我をしている人を捜す。

すると、さつそく見つかった。

「はあ……まさかパーティを追放されるとは……。王国最強と言われた剣士も、怪我ひとつでこのザマか……」

そう呟きながら歩いているのは、立派な装飾のついた剣を腰に差した男性だ。

年は二十歳くらいだろうか？ 背が高く、すらっとした体形で、顔はすごく整っている。

男性にしては長めの珍しい銀色の髪を、首の後ろでくくっている。

なんだかとても目立つ人だ。……というのはいいとして。

その男性には、肘のあたりに擦りむいたような傷があった。

ちようどいい。あの傷を治してお金をもらえるよう交渉してみよう。

私は剣を持ったその男性に駆け寄り、声をかける。

「こんにちは。回復魔術はいかがですか？」

剣士の男性は、急に現れた私に驚いた顔をする。

「回復魔術……？ きみが？」

「はい」

私が頷くと、男性はすぐに苦笑した。

「はは、冗談はよしてくれ。回復魔術なんて使える人間はそうそういない」

「そうなんですか？」

「そうだよ。でなければ、冒険者がポジションなんて値段のわりに効果の薄い薬品を買い求めたり

しないだろう？」

そう言われても、いまいちピンとこない。

聖女候補に選ばれる人間は全員回復魔術が使える。特に修業なんかをしたわけでもないけど、気付いた頃には使えるようになっていたのだ。

回復魔術なんて、そんなに希少なものじゃないと思っていただけ。

私が不思議に思っていると、男性は俯く。

「……そうだ。回復魔術なんて使えたら、僕の怪我也今ごろは……」

「？ すみません、何かおっしゃいましたか？」

「あ、いや、なんでもないよ。ははは」

取り繕うように笑う、剣士の男性。

気になるけど……今はそれより、嘘を言っていないことを証明するのが先決だ。

「それじゃあ、今からその肘の傷を治しますから、それができたら信用してもらえますか？」

「まあ、目の前で使われたらさすがに疑えないけど……」

「……それで、あの、もしきちんとできたら、少しでいいのでお金をください……」

私が言うと、剣士の男性はくすくす笑った。

うぐ、図々しいって思われたかもしれない。でもお金が欲しいのは本当だし……

私が動揺していると、男性は穏やかに口を開く。

「そうだね。回復魔術でこの傷を治してくれたら、きちんとお金は払わせてもらう」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ」

よかった。断られたらどうしようかと思った。

「それじゃあさっそく……【ヒール】」

私は剣士の男性に対して回復魔術を発動させた。

私の手から淡い緑色の光が発生し、肘の傷を覆う。

そして、一秒もかからず治療完了。

「はい、できました」

「……驚いた。本当に回復魔術を使えるんだな」

剣士の男性はすっかり塞がった肘の傷を眺めて感心したように言う。

褒められて、少し誇らしい気持ちになった。

このセルビア、元聖女候補ただけあって回復魔術は得意だったりするのです。

男性はにっこり笑う。

「約束だから代金を払うよ」

「ありがとうございます！」

やった！ これで今日のご飯を買える！

「……」

私が喜んでいると、剣士の男性は何か考えるようにこちらを見ている。

それからおもむろに自分の服に手をかけて――

「すまない、これを見てもええないか」

「うえっ？」

え？　なんで？　どうしてこの人は急に自分のシャツをまくり上げてるの？

見慣れない男性の上半身をいきなり露わにされて、私は固まってしまふ。

けれど、すぐに私は男性の胸から逆の脇腹にかけて深く刻まれたそれに気付いた。

「……傷、ですわね」

「うん。僕は以前、魔物との戦いで魔力回路が傷ついてしまった。おかげで僕は力の大半を失ったんだ……」

とても深刻そうな顔で言われた。

重い話のところ申し訳ないんだけど、魔力回路ってなんだろう……？　よくわからない。

戸惑う私に構わず、剣士の男性は続ける。

「駄目元でいい。これに回復魔術をかけてみてくれないか？　金は言い値で払う」

「は、はあ」

何かがやらだけど、お金がもらえるなら回復魔術くらい喜んでさせてもらいます。

少し傷が深そうなので、使う魔術を変えてみようかな。ただの【ヒール】だと威力が足りないかもしれないし。

目を閉じ、集中して――

【聖位回復】

私が詠唱した途端、さっきよりもはるかに強い光が剣士の男性の体全体を包む。

光の粒子は深部まで潜り込んでいき、全身の傷を癒していく。

よし、治療完了。

これで治ったはずだけど……どうかな？

「「……!?!」」

あれ？　剣士の男性が目を見開いてる。

というか、通行人にまで注目されているような……

私はおそるおそる、男性に声をかける。

「えっと、これで治ったと思います」

「な、治った……!?　本当に治ったのか!？」

「そのはずですよ」

見たところ、剣士の男性の傷は完全に塞がっている。

男性は驚きを隠しきれないというように、じつくり傷のあった場所を見つめている。

「最上級のポーションをどんなに飲んでも治らなかったのに……」

「ぼーしんが何かはわかりませんが、せっかくなら体を動かして試してみるのはどうでしょう？」

「あ、ああ。そうだな。そうしてみよう」

私の提案に頷くと、剣士の男性はその場でぐぐつ、と両足を曲げた。

そして次の瞬間、あり得ない勢いで真上にすっ飛んでいった。

「えっ……!？」

すごい跳んでる！ 剣士の男性が飛び上がった高さは、私を縦に十人並べても届かないほどだろう。

こんなことって人間ができるものなの!？」

数秒後、すたつと華麗に着地する剣士の男性。

着地の衝撃にもまったく動じていない。

私が同じことをやったら……いや、とても無理だ。考えただけで怖い。

一方剣士の男性のほうも、信じられないというように自分の手を開いたり閉じたりしている。

「本当に戻っている……きみはいったい何者なんだ!？」

「それはこっちの台詞です!」

あんな身体能力の人に比べたら、私なんて普通の人みたいなものだと思う。

「とにかくありがとう！ きみのおかげで僕はまだ冒険者としてやっていけそうだ!」

「わわわわわ」

勢いよく手を握られ、ぶんぶん振られる。ち、力が強い。

「約束通り、金は言い値で……いやいつそ全財産を譲渡しよう」

「い、いやそんな大げさな。パンを買うお金くらいで十分です」

「それはさすがに謙虚すぎるぞ!」

男性は目を見開いてるけど、そんなこと言われても、ただ回復魔術を使っただけだし……そのとき、ぐう、と私のお腹が鳴った。

「……すみません……朝から何も食べていなかったもので……」

どうしよう。すごく恥ずかしい。

「あはははは」

「わ、笑わないでください」

「いや、悪気はないんだ。さっきのすごい回復魔術との落差に驚いただけで。……どうだろう、お

礼も兼ねて一緒に食事でも」

食事と言われても、私いま無一文なんですわ。

「すみません。お誘いは嬉しいんですが、遠慮させていただこうかと——」

「もちろん全部奢らせてもらうよ」

「行きます!」

思わず即答すると、剣士の男性は再びくすくす笑った。

あれ？ 私、また恥をさらしてない？

顔を熱くする私に、男性は優しく微笑みかけてくる。

「そう言ってもらえてよかった。それじゃあ行こうか。いい店を知ってるんだ」

「ありがとうございます……」

そんなわけで私は剣士の男性に連れられて街中を移動するのだった。

劍士の男性に連れて来てもらったのは、おしやれで清潔感のある隠れ家のようなお店だった。席まで案内してくれた店長さんと顔なじみのようだったし、よく来ているのかもしれない。

個室に入って劍士の男性があれこれと店員に注文する。

それが済むと、彼は私に向き直った。

「改めて名乗るよ。僕はハルク。冒険者をやってる」

「ハルクさん、ですか。私はセルビアです。仕事は……回復魔術屋、でしょうか」

始めたばかりだけど、一応そう言っておく。

すると、ハルクさんはなんだか困ったように笑った。

「その言い方だと、やっぱり知らないのかな」

「？ 何がですか？」

「回復魔術が、途轍もなく希少な魔術だってこと。……それこそ、聖女候補くらいじゃないと簡単には使えないほどにはね」

「え」

希少？ 回復魔術が？ ……そうなの？

「で、でも、聖女候補じゃなくなつて、使える人も少しはいますよね？」

「まあ、何十年も魔術と薬学を研究すれば可能だろうけど……」

「ほ、ほら！」

「けど、相当頑張つても【上位回復】より効果の高い魔術を使うのは難しいだろうね。何より、

【聖位回復】は聖女の素質がある者にしか使えないはずだよ」

……

知らなかった。だって昔から普通に使えたり、物心ついてからはずっと他の聖女候補たちと一緒に暮らしていたし……

「セルビア。一応確認するけど——」

「はい、元聖女候補です……」

なんだかもうバレてるみたいなので、白状した。

ハルクさんは苦笑する。

「やっぱりか。どうして教会にしかないはずの聖女候補が、回復魔術屋なんてやってるんだい？」

「実は……」

私はハルクさんに事情を話した。

他の聖女候補に嵌められたこと。

十年以上も尽くした教会にあつさり捨てられたこと。

一文無しなので、唯一お金になりそうな回復魔術を売ろうとしていたこと。

「私は本当に何もしてないんです。それなのに、こんなにあつさり捨てられるなんて……」

私が言うと、ハルクさんはなぜか力強く頷いた。

「わかる……わかるなあ……！」

え？ 何がですか？

ハルクさんは虚ろな目で言う。

「実はね、セルビア。僕もついさつきSランクパーティを追放されたところなんだ」

「……」

『怪我人の剣士なんてもういない』って。ずっとパーティに貢献してきたのにね……」

……なんだかすごく親近感の湧く話だ！

「そ、それは詳しくお聞きしても……？」

私が身を乗り出すと、ハルクさんは「もちろん」と頷く。

「僕はそれでも『剣神』なんて呼ばれたSランク冒険者なんだ。けど、少し前に魔物との戦いで魔力回路を損傷してしまったせいで、以前ほどパーティの役に立てなくなった」

話の腰を折るようで申し訳ないけど、私は手を挙げて尋ねる。

「あの、すみません。その魔力回路、ってなんですか？ さっきから気になっていて」

「ああ、体の中にある魔力の通り道のことだよ。誰しも持っているけど、これが傷つくと魔術や身体強化が使えなくなる」

「身体強化というのは」

「魔力を使って肉体を強化すること。ほら、さっき治療してもらったあと、僕が跳び上がったときに使ってたあれだよ」

「ほあー……」

なるほど。私は魔術しか使ったことがなかったけど、魔力にはそんな使い道があったのか。

どうりでさっきのハルクさんのジャンプがすごかったわけだ。

「剣士の僕は、身体強化がないと途轍もなく弱くなる。その分は経験と技術でどうにか補っていたけど……パーティメンバーたちはそんな僕に苛立っているようだった。それで今日、とうとう僕はパーティを追い出されたというわけ」

「そうだったんですね……」

冒険者は魔物と戦う機会が多い職業だと聞くから、確かに怪我をしたままですべて続けるのは難しいだろう。

……あれ？

「でも、怪我が治ったならまたパーティに戻れるんじゃないですか？」

ハルクさんが弱くなる原因になった魔力回路の傷は、もう治してある。身体強化も使っていたし、剣を使うにも支障はないはずだ。

なのに、ハルクさんは首を横に振った。

「残念ながらそうでもないんだ」

「え？」

「僕はもともとあのパーティでは嫌われてたからね。一度パーティを抜けた以上、彼らは僕が戻ってくることを全力で拒絶するはずだ」

復帰するのを全力で拒絶って……いったいどんな関係なんだろう。

ハルクさんって、あんまり人に嫌われるタイプには見えないんだけど。

そのあたりのことを聞こうとしたところで――

「お待たせしました。ご注文の品です」

店員さんがお盆に皿をいくつものせてやってきた。

湯気の立っているスープ、パン、肉料理がテーブルに並べられていく。

お、お肉だ……！ 教会では滅多に食べられなかった旨味の塊がこんなにたくさん……！

「そんなに嬉しそうにしてみらえると、こっちも嬉しいよ」

「か、顔に出てましたか」

「セルビアはわかりやすいね」

ハルクさんが口元に手を当てて小さく笑う。

仮にも淑女教育を受けた元聖女候補の私より、この人のほうが上品な気がしてならない。

そんなハルクさんは再びメニューを眺め始めた。

「お酒もあるけど、セルビアはどうする？」

「い、いえ、お酒はさすがに――」

「飲むと嫌なこと忘れられるよ」

あ、ハルクさんが虚ろな目をしてる。

「……飲みます」

私だって今日はさんざんだったのだ。

教会ではご法度だったけど、私だって一応成人している。

せっかくだから飲んでみるとしよう。

「じゃあ、乾杯」

「乾杯です」

私とハルクさんは、店員さんに渡された果実酒入りの木製ジョッキを小さな音を立てて合わせ――

三十分後。

「だから本当酷いんだって！ 『金色の獅子』なんて格好いいパーティ名つけてるけど、あいつらみんなワガママばかりで！ ギルドに教育係やれって言われたけどもうやってらんなくて！」

「わかりますわかります！ 私のところだって酷いですよ、毎日頑張ってるしんどいお祈りを続けてたのに、こんなにあっさり捨てられるなんて思ってもみませんでした！」

「ああ、お互い酷いことがあったねセルビア！ 飲んで忘れよう！」

「もちろんですハルクさん！」

テーブルを挟んで私とハルクさんは愚痴をぶちまけまくっていた。

これがもう、盛り上がる盛り上がる。

ああ、つらい気持ちを分かち合える相手がいるって素晴らしい。

「こんなに話が弾んだのは久しぶりだよ」

「私のです」

しみじみ言われて、思わず同意した。

ハルクさんは、そんな私に尋ねる。

「セルビアは、これからどうするか決めてるのかい？」

「うーん……回復魔術を売って、どうにか生きていければいいなあ、という感じですね」正直、自分でもどうしたらいいのかよくわからない。

けれど教会を追い出された以上は自分の力で頑張るしかない。

私がそう考えていると、ハルクさんは意を決したように言った。

「それなら——僕と一緒に旅でもしない？」

「旅、ですか？」

「うん。いろんな場所に行つて、美味しいものを食べたり、観光名所を見物したり」

な、なんて心惹かれる提案だろう。

長らく教会に閉じ込められていた私にとって、旅なんて憧れそのものだ。

「私は嬉しいですけど……いいんですか？ 私、かなり世間知らずですよ？」

「僕がフォローするから大丈夫。それに追放された者同士、きつとうまくやれると思うんだ」まっすぐ目を見てくるハルクさんに言われ、私は思わず頷いていた。

「はい。よろしくお願いします！」

私の答えを聞いて、ハルクさんは嬉しそうに微笑んでくれる。

「よかった。さっそく、旅をする具体的な方法なんだけど……」

「はい」

テーブルを挟んだまま、ハルクさんと今後の予定について話し合う。

「まず旅をすると、移動費やら滞在費やらお金がかかる。外国に行くときは身分証明のためにややこしい手続きもやらなくちゃいけない」

「なんだか大変そうですね……」

ただ歩いていろんな街を巡るだけかと思つたら、旅つていうのはそんなに簡単じゃないみたいだ。

「そこで提案なんだけど、セルビアも冒険者にならない？」

「私が冒険者に、ですか？」

「ああ。冒険者は国に縛られない仕事だし、冒険者登録をしておけば身元も保証される。旅をするには一番都合がいいんだ」

ハルクさんはそう言うけど……私としては不安が大きい。

「……私なんかが、冒険者になれるんでしょうか」

魔物と戦うなんて、とてもできる気がしない。

すると、ハルクさんはあっけらかんと声を立てて笑う。

「あはは、心配いらないよ。戦うのは全部僕がやるから」

「そ、それはさすがに申し訳なさすぎますよ！ 私もちやんと戦います！」

「気持ちには嬉しいけど、そのあたりは本当に大丈夫だよ。それでも僕、戦うのは得意なんだ」

にっこり笑ってそう言い切られてしまうと、私は何も言い返せない。……まあ、実際に私に戦いのできるかっていうと、きつとなんの役にも立てないだろうし。

「じゃあ、せめて回復魔術を頑張ります」

「うん、助かるよ」

というわけで、今後の予定が決定。

どうやら私は冒険者になるようです。

不安ではあるけど……ハルクさんはすぐ頼りになりそうだし、大丈夫かな？

「けど、冒険者ってどうやってなったらいんですか？」

「ギルドに行って登録するだけだよ。お金もいらない。ただしちょっとしたテストがある」

「テスト、ですか」

「なんだか不穏な響きだ。」

「うん。まあ、そのあたりは明日話すよ。随分飲んだし、今日はもう休もうか」

ハルクさんはそう言い、店員さんと呼んで会計を済ませてしまう。

「……すみません。お金もないのに好きに食べてしまつて……」

いくらテンションが上がっていたからつて、さすがにちよつと食べ過ぎてしまった。

なんだか自分がすぐく図々しい人間に思えてくる。少しは遠慮しますよね、普通。

けれどハルクさんは爽やかに笑う。

「はは、きみの回復魔術のおかげで、絶対治らないと思つてた怪我が治ったんだ。この程度じゃ全

然足りないくらいだよ」

「うー……そう言つてもらえると助かります」

私は恐縮しつつ、ハルクさんと一緒に店を出る。

酔いが回つてふらふらだった私は、ハルクさんに手を引かれて宿屋まで連れて来てもらった。

「それじゃあ、お休み。僕は隣の部屋にいるから何かあつたら呼んでね」

「はい……」

私はへろへろの声でそう返事をする。

酔つ払つて集中できないので、回復魔術で酔い醒ましをすることもできない。

ハルクさんは苦笑して、部屋を出て行つた。

（……ご飯だけじゃなく、宿代まで出してもらつちやつた……それに介抱まで……）

今日はハルクさんに頼りっぱなしだ。

「なんとか役に立てるように頑張らないと」

そんなことを考えながら、私は眠りに落ちた。

第二章 冒険者ギルド

ハルクさんと出会つた日の翌朝、私たちは街の冒険者ギルドにやってきていた。

教会ほどではないものの、かなり大きな木造の建物を見上げて、私は思わず声を漏らす。

「ここが冒険者ギルドですか」

「そうだね。見るのは初めてかい？」

「はい」

ハルクさんに連れられてスイングドアをくぐると、中ではがやがやと喧噪が広がっていた。

「はー……なんだか賑やかですね」

「ギルドの支援なしには冒険者は成り立たないからね。依頼の斡旋とか、素材の買い取りとか、冒険者の用件はとりあえずここで片付くって覚えておくといいよ」

「冒険者登録は、あっちの窓口で——」

すると、ハルクさんが受付窓口を指さしたところで、熊みtainな大柄な男性がギルドの奥からずかずか歩み寄ってきた。

刈り込んだ短髪や頬の大きな傷が、只者じやない感をこれでもかというほど伝えてくる。

ハルクさんの知り合いだろうか？

というか、あの、ちょっと怖いんですが。

この方、なんだか怒ってますんか？

「ハルク殿。お待ちしておりましたぞ」

短髪の男性は、ハルクさんの前までやってくる——いきなり勢いよく平伏した。

「このたびは、『金色の獅子』の馬鹿どもがすみませんでしたアアアアアアアアア！」

「びっ」

み、耳が痛い！

「あ、頭を上げてください、ギルマス。いち冒険者に過ぎない僕相手にそんなことをしては、まずいでしょう」

「それはできません！『金色の獅子』の連中からすべて事情を聞きました。ハルク殿が怪我をしたとはいえ、パーティから追い出すなど……！何度頭を下げてでも足りませぬ！」

ハルクさんが恐縮しているけれど、短髪の男性は頑なに平伏したまま姿勢を崩さない。

私は突然のことに戸惑いながら、ハルクさんに尋ねる。

「あの、ハルクさん。こちらはお知り合いの方ですか……？」

「あー。うん。この人はエドマークさんといって、冒険者ギルドの支部長なんだ。簡単に言えば、この国のギルドで一番偉い人だよ」

教会という教皇様のような地位の人、ということだろうか。

「そんなすごい方が、なぜこんなことを……？」

「話せば長くなるんだけど……僕がパーティを追い出されたって話はしたよね？」

「は、はい」

ハルクさんが言っているのは、怪我が原因でパーティにいられなくなった、という経緯のことだろう。

私が頷いたのを見て、ハルクさんは話を続けた。

「実は、そのパーティに入ったもとの理由が、ギルマスに頼まれたからだだったんだ。将来有望なパーティがあるから面倒見てくれて。それで僕はしばらくパーティに参加している教えていたんだけど、怪我のせいで僕はパーティを追いつけなくなった。だからギルマスは、僕が嫌な思いをした原因は自分にあるって考えてるんだ」

「……なるほど」

ハルクさんがパーティに参加したのは、ギルドマスターであるエドマークさんの依頼があったから。

それがなければ、ハルクさんがパーティを追いつけられなくて悲劇も起こらなかった。

そのことに責任を感じて、エドマークさんは謝罪をしているということらしい。

エドマークさんは必死にハルクさんに頭を下げ続けている。

「本来ならば『金色の獅子』の馬鹿どもには厳罰を与えねばなりません。しかし、Sランクパーティである彼らにはどうしても強く出られないのです……！ 儼にできることならなんでもしますゆえ、どうかご容赦を……！」

「ギルドの事情はわかってます。心配しなくても、僕はもう気にしていませんよ」

「寛大な言葉に感謝いたします、ハルク殿！」

ハルクさんの言葉に、エドマークさんは安堵したように言った。

ふーむ……今のやり取りを聞く限り、ハルクさんを追い出したパーティもかなりの地位にあるよ

うだ。

ギルドの長であるエドマークさんが簡単に処分できないって、とんでもない話なのでは。

「それにしても将来有望なパーティの教育係を任されるって……ハルクさんはエドマークさんに信頼されているんですね」

組織のトップに名指しで頼まれごとをされるなんて、ただごとじゃないと思う。

私の発言に、エドマークさんが胸を張って頷いた。

「当然ですとも！ なぜならこのハルク殿は、パーティ単位ではなく個人でSランクなのでからな！」

「……えっと、それってどのくらいすごいですか？」

私が首を傾げていると、エドマークさんは得意げに続ける。

「世界に何千人という冒険者の中で、個人でSランクなのはハルク殿ただ一人だけです！」

「えっ」

「あはは……まあ、一応そういうことになってるね」

驚きながら隣を見ると、ハルクさんが苦笑しながら答えた。

……どうやらこの人、私の想像よりはるかにとんでもない人だったようだ。

その後、エドマークさんはしばらくハルクさんの逸話を語ってくれたけど、ハルクさんは居た堪れなくなってきたらしくおもむろに口を開く。

「ぎ、ギルマス。僕のことともういいでしょう。それより用件を聞いてください」

「そう、その鬼神のごとき剣撃は海を割り山を砕き、あらゆる魔物を瞬く間に――む、なんですかハルク殿？」

ハルクさんはエドマークさんの話を遮ると、私を手で示す。

「彼女の冒険者登録をお願いします。彼女は今日から僕とパーティを組むので」

「……なんですか？」

ハルクさんが言った瞬間、エドマークさんがぎろりと私を見た。

あれ、なんだか急に視線が鋭くなったような……

「ほう、あなたがハルク殿と……ほほう？」

「な、何が言いたいんですか？」

エドマークさんに意味深に見つめられて思わずたじろぐと、彼はビシッ！と私に指をつきつけてきた。

「でははっきり言いましょう。貴方まさか、ハルク殿を誑かしたりしてないでしょうな？」

「してないですよ!？」

急にどんな疑いをかけてくるんですかこの人は！

「ではなぜハルク殿が貴方のような戦闘慣れしていなそうな少女をパーティメンバーに選ぶのです!? ハルク殿は冒険者なら誰もが憧れる『剣神』！パーティメンバーなんて選り放題だというのに！これは何かあつたに違いありません!」

「いや、あの、何かあつたと言えばあつたんですが……」

「『何かあつた』!? やはり貴方はハルク殿をその幼くも儂けな美貌で誘惑したと!？」

「してませんってば!」

どうしよう。話が全然通じない。最初はすごくいい人そうな感じだったのに！

……なんて、私が困っている。

「――ギルマス？」

ハルクさんが笑顔でエドマークさんに声をかけた。

途端にエドマークさんが固まる。

あれ、なんだろう。

ハルクさんは笑っているのに、妙に迫力が……

エドマークさんは、ぎこちない動きでハルクさんに顔を向けた。

「は、はい……」

「セルビアは僕の恩人です。彼女にあまり失礼なことを言わないでもらえますか？」

「お、恩人ですと？ いったい何があつたのです？」

エドマークさんに聞かれ、ハルクさんは昨日のできごとを説明した。

「……というわけで、彼女は回復魔術で僕の怪我を治してくれたんです」

「あ、ああ、ああ……儂はなんということを……!」

エドマークさんはがくりと膝をつき、私に向かって勢よく頭を下げた。

「すみませんでしたアアア！ 知らぬこととはいえ大変な失礼を……どうか気の済むまで儂を

殴^{なぐ}っていただきたい！」

「そんなことしませんよ!? 頭を上げてください！」

私は慌^{おわ}ててそう言うけど、エドマークさんは頑^{かた}なに姿勢を変えようとしなない。

私は戸惑^{とまど}いつつ、エドマークさんに聞こえないよう小声でハルクさんに尋ねる。

「ハルクさん、この人は本当になんなんですか……?」

「……何年前かに、まだ現役冒険者だったギルマスが僕が助けたことがあってね。それ以来ずっとこんな感じだよ……」

「……なんだか納得しました」

ハルクさんも私と同じように小声で答えながら、遠い目をしていた。

私の中でエドマークさんへの印象は、すでに『ハルクさん信者』に固定されつつある。

ハルクさんは苦笑いしながらエドマークさんに声をかけた。

「それでギルマス、セルビアの冒険者登録の話ですが」

「そ、そうでしたな。それでは登録テストを行^{おこな}うとしましょう」

ようやくエドマークさんは立ち上がると、私たちを先導して、カウンターの椅子に座らせる。

その後「準備してきますので少々お待ちを」と建物の奥に消えていった。

待ち時間を使って、私はハルクさんに今更な質問をする。

「ところで、このテストってどんなものなんですか?」

「簡単に言うと、冒険者のランクを決めるためのものだね。与えられたランクによって、ギルドの

待遇や受けられる依頼の内容が変わってくる」

ハルクさんの説明によれば、ランクはSが最高位でA、B、C、D、E、Fの順に下がっていく。基本的にはFランクからスタートする冒険者が多いらしい。

「……ちなみに、テストの内容というのは?」

「それは個人の得意分野によって変わるから、なんとも言えないなあ」

私が聞くと、ハルクさんは考え込むように腕を組んだ。

「僕みたいな剣士だったら模擬戦^{もぎせん}だし、攻撃魔術が得意なら的当てなんだけど……もしセルビアの試験が回復魔術になるとしたら、その場合はどうなるかわからない。何せ見たことないからね」

「そうですか……」

先にテストの内容を聞いて心の準備をしておきたかったけど、ハルクさんも知らないらしい。うう、胃が痛い。

「お待たせしました。試験内容はこれです」

すると、エドマークさんが受付窓口の奥から何かを取ってきた。

これは……植物の種?

ハルクさんがそれを見て、エドマークさんに尋ねる。

「見たところ魔力植物の種ですね。これをどうするんですか、ギルマス」

「このマキアの種に回復魔術をかけ、発芽させるのです」

どうやらこの種はマキアという植物のもののようだ。……というのはいいとして。

「あの、エドマークさん。魔力植物ってなんですか？ 普通の植物とは違うんでしょうか」

「魔力を発生させる植物、と説明するのが手っ取り早いですが、大氣中に満ちた魔力を我々は吸収し、魔力回路を通して利用しているわけですが、生物が放出した魔力はそのまま再び使うことができます。そのような『死んだ魔力』を『生きた魔力』に変換し、大氣中に戻しているのが魔力植物です」

「はあ……そんなものがあるんですね」

「思えば魔力なんてなんの気なしに使っていたけど、その大本^{おもと}なんて考えたこともなかった。そんな仕組みになっているんですね」

「ちなみに説明をしてくれている間、エドマークさんは生暖^{なまぬる}かい目で私を見ていた。心なしか物知らずな子供に対する眼差^{まざ}しに見えなくもない。

話を戻すようにハルクさんがエドマークさんに尋ねる。

「それでギルマス、発芽とは？」

「はい。回復魔術は生命力を与えるもの。普通の動植物に使っても治療以外の効果はありませんが、マキアのような魔力植物にかければ別です。魔力植物は魔力を取り込んで育つため、回復魔術によって成長^{うなが}を促すことができるのです。今からセルビア殿にはこのマキアの種に回復魔術をかけてもらい、その成長度合いに応じてランクを決定いたします」

ハルクさんの質問に資料を見ながら応じるエドマークさん。どうやら支部長であるエドマークさんも回復魔術使いのテストは初めてらしい。

私はエドマークさんに確認するように尋ねた。

「えっと、この種に回復魔術をかければいいんですね？」

「その通りです、セルビア殿。しかし生半可^{なまはんか}な回復魔術ではいけませんぞ。何しろこのマキアという植物は、本来の成長速度が相当に遅いですから。思いつきやってください」

「思いつきですか。わかりました」

エドマークさんの言葉に頷く。ここまで言うからには、マキアの種を成長させるには相当多くの魔力が要求されるんだろう。これは気合いを入れなくては。

「あ、セルビアちよつと」

「はい？」

「さあやるぞと意気込んでいたら、ハルクさんに手招きされた。なんだろう。」

「……セルビア。一応言っておくけど、昨日僕に使った【聖位回復^{セントリッドとセル}】は禁止だ。元聖女候補だつてバレてしまうからね」

「……なるほど」

ハルクさんの耳打ちに頷いておく。

私が元聖女候補だとバレたら色々と面倒なことになる。ここはハルクさんの言う通りにしておく。

さて、じゃあどうしようか。

【聖位回復^{セントリッドとセル}】が使えないなら……

私が考え込んでいる横で、エドマークさんがハルクさんに話しかける。

「それにしても、ハルク殿。セルビア殿が回復魔術師というのは本当なのですか？」

「本当ですよ。信じられませんか？」

「ハルク殿の言うことでも、こればかりは簡単に領けませんなあ……。僕も多くの冒険者を見てきました。回復魔術を使える者など今まで一人も——」

よし、それじゃあこれでいこうかな。

二人の会話を聞き流しつつ、私は口を開く。

【最上位回復】

——その瞬間、どがんと、という轟音が頭上から聞こえた。

天井が崩れた音だ。

より正確には——私が回復魔術をかけたマキアの種が一瞬で成長し、大木となってギルドの天井を貫通した音だった。

「……は？」

「「……なんじゃこりゃあ——」つ!?」

エドマークさんはぼかんと口を開け、ギルド中から冒険者たちの絶叫が響いた。

……あれ？ やりすぎた？

まさかいきなり、種が樹齢何百年みたいな木になるなんて思わなかった。マキアの種は成長しづらいという話はいつたいたんだっただろう。

というかこれ、壊した天井を弁償しないといけないのでは……？

「ほら、だから言ったじゃないですか、ギルマス」

ハルクさんが笑いをこらえるような顔でそう言った。

一方のエドマークさんは顔を青くして、再び平伏してしまう。

「疑って申し訳ありませんでしたアアアア！」

「わかりましたから頭を上げてくださいエドマークさん！」

どうしてこの人はすぐに過激な謝罪をするんですか！

「まさか本当に回復魔術が使えるとは！ しかもここまで強力なものを……！ ああ、僕の目が曇っておりました！ どうか許していただきたい！」

「本当に気にしていませんから。信じていただけたならそれで十分です。……それより、すみません。天井を壊してしまつて」

ギルドの天井は、私が成長させたマキアの木によって支えられているものの、一部はすでに崩落寸前だ。今もギルド職員の方たちが慌ただしく駆け回って対処してくれている。

正直、かなり申し訳ない気持ちだ。

「何年かかるかわかりませんが、必ず弁償します」

「とんでもない、弁償など結構です！ 不当に疑ってしまったうえに、さらに修繕費の請求などしては、ギルドマスターの名が泣きます」

「でも……」



私が納得できないでいると、エドマークさんはこう補足した。

「それに、ギルドが壊れることはよくあるのです。冒険者は喧嘩けんかっ早い者が多いですからな」

「そうなんですか？」

「そうですとも。まして今回はテスト中の事故。セルビア殿が弁償べんしょうする理由などありません」
ちらりと横目で見ると、ハルクさんもうんうん頷いている。

どうやら本当にギルドの建物が壊れるのは珍しいことじゃないようだ。冒険者ってつくづく聖女候補や修道士とは常識が違うなあ……

「さて、ギルマス。ともかくセルビアは合格ということでいいですよね？」

ハルクさんの言葉に、エドマークさんが大きく頷く。

「もちろんですとも！ ギルドマスターとして、セルビア殿の冒険者登録を歓迎いたします！」

「あ、ありがとうございます」

よかった。色々あったけど無事に私も冒険者になれたみたいだ。

まったく、エドマークさんに疑われたときにはどうなることかと――

「――Aランク冒険者として」

「へ？」

今何かエドマークさんから予想外の言葉が聞こえた気がする。

「え、Aランクって下から何番目ですか」

「上から二番目ですな」

「嘘ですよね!?　なんでそんなことになってるんですか!？」

種はちゃんと成長させられたとはいえ、せいぜいEランクかDランクからのスタートだと思っただのに!

驚く私に、エドマークさんは咳払いをしてから説明してくれる。

「もちろんこれには理由があります。まず、回復魔術の希少性。回復魔術師というのは長いギルドの歴史でも数人しか現れていません。さらにセルビア殿以前にギルドに在籍していた回復魔術使いは皆、【ヒール】以外使えなかったのです」

「ひ、【ヒール】以外使えない……!？」

【ヒール】といえば、回復魔術の中で一番効き目の弱いものだ。

私は物心つく前からすでに使えていた。

他の聖女候補たちだって、指のささくれや肌荒れを治すのにしょっちゅう使っているくらいのものなのに。

「先ほどのマキアの種の発芽のテストでたとえるとわかりやすいですな。セルビア殿以前の最高記録は、小さな苗木程度です。対してセルビア殿は……」

「……木、ですもんね」

私がテストで発芽させたマキアの木は、おそろくてつぺんまで私の背丈の十倍以上あるだろう。

エドマークさんは、真剣な目で私を見た。

「よって、セルビア殿はAランクで間違いありません。何しろセルビア殿は、ギルド発足以来最高

の回復魔術師なのですからな」

「ひ、ひええ……」

どうりでハルクさんやエドマークさんが、回復魔術が使えることを簡単に信じてくれなかったわけだ。

回復魔術使いが珍しいとは聞いていたけど、そこまで希少だとは想像していなかった。

『A』と彫られた冒険者証を受け取りつつ、隣のハルクさんに尋ねてみる。

「……ハルクさんはこうなることを予想してたんですか？」

「そうだね。不治と言われた僕の傷を治したくらいだから、妥当な評価だと思うよ。正直僕はSランクでもいいと思うんだけど……」

ハルクさんの言葉に、エドマークさんは難しい顔をする。

「儂個人としてはそうしたいくらいなのですが……規則により、最初からSランクとして登録することはできないのです」

「そうですか。それなら仕方ないですね」

「ええ、残念です」

二人して頷き合っている。

私を置き去りにして話を進めないでください。当人はスケールの大きさに全然ついていけない。せん。

ハルクさんは話題を戻すように、私に言う。

「ともかく、Aランクなら最高の結果だよ。大抵の国にフリーパスで入れるようになるし」
「そうなんですか」

「ああ。旅するのに不便はないだろうね」

それなら、ここに来た目的はばっちり達成できたことになる。

予想外の結果ではあったけど、無事に済んでよかった。

エドマークさんからの疑いもすっかり晴れたことだし。

「セルビア殿。こちらで少し説明をさせていただけますかな」

「あ、はい」

受付窓口の奥からエドマークさんに呼ばれたので、私は小走りですっちに向かう。

冒険者の説明。旅のためとはいえ私も冒険者になったわけだし、しっかりと覚えて――

「おいおい、なんだよこのバカでけえ木！ 誰の仕業だあ？」

突然、ギルドの入り口のほうから大きな声が聞こえた。

そこには派手な金色の髪をした青年をはじめ、きらびやかな装備に身を固めた四人組がいた。

「……『金色の獅子』」

ハルクさんが呟く。

『金色の獅子』って……確かハルクさんを追い出したっていうSランクパーティ？

「おっ、ハルクじゃねえか。はは、まだ冒険者やってんのかよ」

金髪の青年はハルクさんを見ると嫌らしい笑みを浮かべ、他の三人を連れてこっちにやってきた。

……どうしよう。

全然仲良くなれそうな気がしないんですが。

「こんなどこに何しに來たんだよハルク。怪我で身体強化も使えなくなったお前じゃ受けられる仕事なんてねえんじゃねえの？」

あからさまに馬鹿にするような口調で言ってくる金髪の青年。

年齢は十代後半くらいで、腰には装飾の多い剣を差している。

整った顔立ちをしているけど、喋り方や表情からは気性の激しさが伝わってくる。

ハルクさんが何か言おうとする前に、横から鋭い声が飛んできた。

「ロレンス！ 貴様、ハルク殿になんと口利き方だ！」

「ああ？ 何か文句あんのかよ、エドマーク」

ギルドの長であるエドマークさんと呼ばひ捨て……

ハルクさんでもエドマークさんには敬語を使っていたのに。

「文句だ？ あるに決まっているだろう！ 今この場でハルク殿をパーティから追放したことを謝罪しろ、ロレンス！」

エドマークさんの言葉に、金髪の青年改めロレンスは肩をすくめた。

「なんで俺たちが謝るんだ？ 身体強化も使えない剣士なんて、Sランクパーティに置いとく価値ねえだろ。追い出して当然だ」

ロレンスだけじゃなく、彼らの後ろにいる仲間たちも嫌らしい笑みを浮かべている。

エドマークさんは憎々しげに、ロレンスたちを見据えた。

「貴様ア……」

「それよりわかつてんのか？ 今自分が何をしてんのか」

ロレンスはエドマークさんを小馬鹿にするように見やる。

「Sランクパーティは少ない。俺たちが常駐してやってるからこそ、この国は盗賊や魔物の被害が少なくて済んでる。そんな俺たちに上からモノ言うってこの意味、わかつてんのかよ」

「――！」

言葉を失うほど激昂するエドマークさんをせせら笑いながら、ロレンスは言葉を続ける。

「でかい盗賊団をいくつも潰してやった。山ほど人間を食った竜を討伐してやった。俺たちがいなくなれば、またそういうやつらが湧くだろうな。……いいのかよ、エドマーク。俺たちが機嫌損ねてよその国に拠点を移したら、一般市民どもの被害はバカにならねえくらい増えるぜ？」

「ぐううううう……！」

目を見開き、歯ぎしりをするエドマークさん。

か、完全に言い負かされてる……！

見かねたように横からハルクさんが口を出す。

「……ロレンス。ギルマスに対してその態度はなんだい？ きみたちは確かに強いが、だからこそ他の冒険者の規範になる義務があるだろう」

「うるせえっ！ もうパーティを抜けたてめに、いちいち指図される義理はねえ！」

「そういう問題じゃない。きみたちはもう少し自分の立場を自覚すべきだ」

「うるせえて言ってるんだろ！ 雑魚が説教すんな！」

ロレンスは嘔みつくように言って、ハルクさんを睨みつける。

それにしても、すごい拒否反応だ。

ハルクさんは、自分はロレンスたちに嫌われてるって言っていたけど、ここまで嫌われているなんて。

肩で息をしていたロレンスは、ハルクさんがそれ以上何も言わなかったことで元の調子を取り戻したようだ。

私が成長させてしまったマキアの木にちらりと視線を向ける。

「それよか、このでけえ木はなんなんだ？ 誰か変な魔術でも使ったのか？」

エドマークさんが悔しそうな顔のまま応じる。

「……それは、こちらのセルビア殿がやったものだ。回復魔術によって植物を成長させた」

「回復魔術う？」

例によって胡散臭そうな顔をするロレンス。

ロレンスは、じろりと私を見てくる。

「本当か？」

「……本当です」

「お前、本当に回復魔術が使えるのか」